(92)他家で飯の食へぬ女

御走馳に招かれて行つて腹を減らして歸つて來る。而して着換もせずに澤庵で茶漬を掻込む。餘所で物を食はなかつた事を誇るかの樣にも見える。

平常行儀作法の心得が無い者に限つて、人の前で畏まる事夥しい。其畏まるのも愼むのでなくて堅くなるのである。平氣で物を食ふ餘裕など有る譯が無い。

嫣やかに且つ淑やかに、人の前で三椀の飯を食ふ女は、必ら

ず正しい躾を受けた者である。以て夫の代理として客に應接せしむ可く、用件の使者として簡派するに足る女である。

妻曰——だつて大勢のお客の中で大口あいて食べられますか食へば食ふで無躾だといふし、食はなければ食はないで又行儀が惡いといふ。何の途妾が惡口言はれるのは同じになるから變だわね。

(93) 夫の歸宅を待たず寢る女

歸が晩いとか何とか恨みがましい事は言ふが、ツイぞ一度火鉢の側に時計を睨めて泣いて居た事はない。何時でも高鼾で寢てる癖に恨みがましい事が能く言へたものだ。ガタピシ玄關の開閉をして這入つても目を覺さず、枕頭に立つて怒鳴ると、强盜かと思つて夜具の中へ潛り込んでしまつた事もある。

妻曰——何時か待呆食はされてから起きて居ては馬鹿らしいと悟つたんです。自分の惡い事は言はないで隨分圖々しいのね。

天民曰——夜遲く歸つた時、妻が起きて待つて居るのを見ると、ア、惡い事をした、氣の毒なと思ふが、クツスリ寢込んで、ウン……寢返りか何かして居る姿を見ると、遲く歸つたのが、好かつた樣な氣持がするものぢや。

(94) 男女の頭腦を同じと思ふ女

終日事務卓の前に頭を疲らして居る夫と、臺所と茶の間との間に迂路々々してる妻と同じ程度に頭腦を使用するものと思

つて居る。從つて其能力を同等に評價してるのも明かである。妾にも解らない事が貴方に解るもんですかトいふ貌を毎度見せられる。

妻曰――男が外で頭を使ふと同じく、女は女相應に宅で頭を使つて居ます。夫ア貴方の頭は偉いんでせうよ。妾のは鋸屑が詰つてるんです。

天民曰――ベラボー奴、男と女と、同じ頭腦であつてたまるかい。

(95) 密かに仕立物を外へ出す女

如何にも自分が縫ふのらしく袖などをいぢつて居るが、何ぞ知らん縫かけて仕立屋へ出してしまう。ミシンが無いといふ口實の下に多分雜巾も買ふ事にするだらう。

自分の物を自分で仕立る樂みを知らぬ女に人の物が縫へる譯がない。而して曰く、妾が仕立たのでは貴方にお氣に入りません。

妻曰――恰好が惡いだの何だのと文句ばかり言ふぢアありま

せんか。夫に妾はお針に雇はれてたのぢアありませんからね、外に用を澤山控へてる身なんですよ。

天民曰――俺の女房は、裁縫も人並以上に上手であつた。

(96) 病氣に同情なき女

頑健な身體を持つといふ事も女に取つては善し惡しである。頭痛がするから寢てる枕頭をドシン〳〵と歩く。一體女が疊の上や緣側を歩く音程騷々しいものは無い。

其癖自分は鼻風邪位で、今にも死に相にウン〳〵唸つて居る。

妻曰――お尻が重たいから歩く音が酷いのだと何故言つてしまはないんです。御遠慮には及びませんよ。

天民曰――病氣だけは同情して貰いたいたとへ。それが妻に隱れた愉快の結果の容氣でも、妻たる者は……。

(97) 食事前に鐵瓶を冷たくしてる女

大騷ぎて瓦斯にお鐵をかける。酣をつける事も出來ぬ。動も

すると食ひはじめてから飯の足らぬ事に氣が付く。準備といふ事は前以て備へる事だとは考へて居ないのだらうと思ふ。但し或時は湯豆腐を一時間前から煮て歸宅を待つてた事もある。序に今夜の内に明日の朝飯を濟したら宜いだらうと言つてやると、マサカと笑つて居たには感心した。

妻曰――年中カン〳〵火を起しては置かれません。

(98) 俳優の繪葉書を藏つてる女

知り合ひでも何でもないのに大事相に藏つて居る。金と時間とを與へ且つ方法を敎へたら早速馬の脚ぐらゐ嚙る氣だと見える。

妻曰――馬鹿におしなさい。一度だつて妾の身持を疑つた人はありません。貴方だつて斯んなに色々な事を並べ立てゝも、妾の貞節は少しも疑つて居ないぢアありません。

――――――――――――

天民曰――卑しむべき事だ、男が藝妓のを何するよりも、より不義的の傾向が見える。

(99) 鼻唄を謠ふ女

洗濯物をするとか、針仕事をする時とかならば尙我慢も出來るが、食事の給仕に侍してフン／＼やるに至つては甚しい。幾何言つても癒らない痼疾である。

默つて凝としてる事が出來ないのだ、作法を知らぬものは大抵斯うだ。

妾曰――妾の行儀が惡い話は聞飽きました。妾は今寢そべつて蜜豆を食べて居ます。

天民曰――酌婦をして居た女が、妻になつたのぢやあるまいし……。

(100) 信仰なき女

神儒佛、基督、天理敎、陶宮術何にてもあれ身の行ひを律す可き一貫せる信仰の無い者は、特に女の身として最大の缺點である。

妾曰――何時か敎會へ行かうとしたら、敎會といふ所は艶書

の取次をする所だと言つたでせう。お寺詣りは婆ジミるといふし、お觀音様に行くといへば活動なら近所にだつてあるといふし、一體怎ういふ積りで斯んな事を言ふんです。

天民曰――女は何者かを信仰しなくては、一日も生きて居られない人間である。但だ其の信仰が、神様であるが、衣服であるかが？である。

最後に妻の曰く

斯んなに色々の事を言はれたが、妾の貞節を疑つたらしい口吻が少しもないのは密かに安心したのでした。

今頃貴方は苦虫を嚙潰した様な顏をして子供の世話をしてるでせう。子供が氣の毒だとは思ひますが、貴方が今更酷く後悔してる狀況を想像しても太して氣の毒には思ひません。お氣に入つた後添をお持ちなさい。而して二三年經つたら二百條位斯んなものをお書きなさい。左様したら貴方の氣違ひさ加減を世間でも知るでせう。

貴方は妾が戀しいんでせう。尙一度謝まつて歸つて來相なもんだと思つてるでせう。貴方の方から謝まらなければならない事は知らないで……。

幸福な男と女との鉢合せ

――『男曰女曰』の卷尾に――

山崎樂堂

僕の友人の先輩に甚だ幸福な人が數人居る。

それらの人がその勤めてゐる役所の後進連と共に、或る春家族同伴の花見をした事がある。一日遊び暮して銘々家に歸つてから、先輩甲氏の妻君が「今日行つた人達は皆ンなあなたの部下ですか」と尋ねた、甲氏は「そうだ」と答へたさうである。又先輩乙氏は男爵である。この人が歸宅すると妻君は「今日行

つた人達は皆ンな平民ですか」と尋ねた乙氏も「そうだ」と答へたさうである。

僕の友人は此の話を聞き込んで後、先輩丙氏に「女は一般に低能兒ですね」といふと、丙氏は「君は自分の妻君を見てさう云ふのだらう、そんな事は無い」と答へたさうである。

僕は此の「男曰女曰」一冊を先づ此の友人に贈つてやらう、すると彼は喜んで別に數冊を買ひ求め、謹んで幸福なる先輩甲乙丙諸氏にそれを献上するであらうと想像する。

友人は自ら痛快の情禁ずる能はずといふ面持で此書を献上するに違ひない。然し献上された先輩諸氏は、その妻君と共に逐

一これを讀んで見て、一向何とも感じない事を、憐れな友人の爲めに僕は厚く同情してやらうと思ふ。

献上された書を見たる旦那は曰く「つまらないぢやないか」と、奥樣は曰く「これは無教育な下等社會の出來事でせう」と。

斯樣な先輩諸氏の群の中に、なほ左の如き人々を見出したと友人と語つてゐる——

一、友人に言傳して自分の歸宅時間を妻君に豫告する人。

一、妻君の入會してゐる長唄會の切符を部下並びに後進に賣り歩く人。

一、西洋間の飾り附けに妻君の意見を仰ぐ人。

一、家事の經濟は妻君が整へ得るものと信じてゐる人。
一、小說「不如婦」の梗概を妻君から聞いて感心したる人。
一、妻君に勸められて靜座法を始めた人。
一、妻君の病床の一輪差へダリヤを買つて來た人。
一、乃公は家内の名前なんぞにさん附けをしないと威張つてゐる人。
一、旅先きから妻君へ出す手紙に英字の頭文字を署する人
其他

之れ怪ふに、女を去る百餘箇の條項を數へ立てる男は尊敬すべき不幸な人間である、隨つて數へ立てられる女は憫殺すべ

き幸福な人間である。

世の中は常に弱者の聲に眞理を保つてゐる。男の數へた百餘箇條は悉く男が弱者としての聲である。「弱き者よ、汝の名は女である」といつたは大ダワケの言葉である。何で女は弱いものか、見渡す此の廣い世間に、イケ洒蛙々々として斯の條項に相當る女が遍滿してゐる、これ故に女が強いのである。女が強いといつて濟まなければ、斯樣の條項を數へ立てる男の尠いのが女を強くしてゐるのである。

知らない程強いものは無い、知らない程幸福なものは無い。今の世に此の強い女が一杯になつてゐる、同時にさういふ男も

亦一杯になつてゐる。言ひ換へれば幸福な女と幸福な男とが鉢合をしつゝ栖をつくてゐるのである。

幸福にして強い一對には、金を儲けるのもある、位のあがるのもある。夫は曰ふ「余は斯かる内助の力を得て成功せり」、婦は曰ふ「妾は斯かる苦勞を拂つて成功せしめたり」と、

救荒事業は益々旺にして人飢ゑ、儉德鼓吹は彌々急にして民貧し。

良人の勤先の自働車に乘り廻はして細民扶助の金を集める夫人、その時丈け綿服を着て慈善芝居を催ほす女性、その他いろ〳〵。これ等を更らに本書の條項に追加せん事を切望せねばな

らぬ。

而して女を去る本書の各條項の腑に落ちぬ男は、即ち人間として根本如何なる條件に於ても女を去るの資格が無いものとして、女と共に我黨の世界から放逐するか、それが難かしければ我黨が潔く――或は意氣地無く――此の世間を逃げ出してしまふの一途に就くべきであらう。

念の爲めに、本書女を去るの條項に一々贊成の意を表する男子達に警告す。卿等はその贊成によつて婦人連より同情を失ふ事を恐れては居まい、然し僕の友人の先輩丙氏の如き「それは君が君の妻君を見てさう思ふのだらう」といふやうな人間がフ

グリを持てる男子の中に、殘念乍ら大勢ウヨ〳〵と活きて居る事を悲しみ給へ、そして彼等を憫むと共に自ら戒め給へ、我黨はかの幸福なる一般の女と男との二者から、仲間外れにされる程の尊敬すべき不幸な弱者であると知り給へ、又弱者でなければならぬと悟り給へ。

くどく云ふ、幸福なる紳士並に淑女諸君よ諸君は世の強者である。

大正三年三月十六日印刷
大正三年三月十九日發行

男曰、女曰
【正價金五十錢】

著者　むらこ
發行者　東京市日本橋區鐵砲町六番地　磯部辰次郎
印刷者　東京市神田區西小川町二ノ七　關口誠信
印刷所　東京市神田區西小川町二ノ七　大進社印刷所

不許複製

發行所　東京市日本橋區鐵砲町六番地　磯部甲陽堂
振替壹五〇五六番

●喜多村綠郎君序 ●綱島佳吉君序 ●兒玉花外君序
●正宗白鳥君序 ●山室軍平君序 ●瀧田哲太郎君跋
●宮田修君序 ●坂元雪鳥君序 ●岡本一平君畫

▼東京朝日新聞記者 松崎天民著▲

淪落の女

四六版全一冊
裝幀 瀟洒
正價 金五拾錢
送料 金六錢

世の光の蔭に泣ける薄倖の女性を描いて、滿腔の同情を注げるもの、その一を「黑縮緬の羽織」その二を「捨ばちのお時」その三を「お小夜の行方」その四を「さまよひの女」その五を「十二階下の夜」と云ふ何れも現代社會の暗面と、人生の痛苦とを語りて、そこに人類の叫喚を描寫せるものなり。これを人生探訪の報告書と見るも好く、これを婦人研究の通信文と見るも妨げず。小說か非ず、雜報か、非ず、これを著者獨得の觀察と筆路とに見よ。

東京朝日新聞記者 松崎天民著

人生探訪

附錄 人生探訪者松崎天民論、薄井秀一

四六版全一冊
本文三百五十頁
附錄二十頁
正價 金六十五錢
送料 金八錢

「淪落の女」を著して文名更に擧りたる松崎天民氏が眞面目にして敬虔なる態度を以て、この人生と世相を觀じたる述作集にして、淪落の男、秋晴十日間、上野淺草記、春を追ひつゝ、銀座界隈、カッフェー、バーとホール、山水十日の旅、東京その折々、寄席印象記、探訪記者の印象等何れも著者一流の人生觀、社會觀察、婦人研究、都會觀、時代觀を描くに、同情ある筆致輕妙にして又一種の魅力あり、小說より趣味深く、講談よりも興味ある珍書として、これを大方の讀書子に提供す。

東京朝日新聞記者　松崎天民著　岡本一平畫伯裝幀

女八人

四六版全一冊
四百六十頁
總クロース綴
天金函入優美
正價金壹圓
送料金八錢

▼板新道の一隅
▼最後の牛肉鍋
▼稻舟の四疊半
▼名代部屋の客
▼紫の風呂敷包
▼廊下の曲り角
▼荒物屋の二階
▼十萬圓の奥樣

小說に非ず雜報に非ず

何れも著者が新聞記者生活の十年間に接觸したる、八人の女性の上に潛む個々の運命を讀みたるもの。

事實と空想の中間を辿り

て觀た『人生探訪の報告書』と見るもよし

274
940

落